『人形の家』と職業婦人

――イプセンの日本受容による女性の生き方の変化――

山元　渚

一　『人形の家』における「職業」の捉え方

ノルウェー作家ヘンリック・イプセンによって書かれた戯曲『人形の家』は、明治四四年、坪内逍遥率いる文芸協会によって日本で初めて上演され、大反響を得た。単に近代劇の画期となる戯曲として価値あるものとなっただけではなく、この作品には女性が自立するための職業そのものの重要性について取り上げられている。そこで本論文では『人形の家』が受容され大きな反響を得ていくなかで、日本において女性の職業意識にどのような変化・繋がりがあったのかを明らかにしていきたい。

今回は日本で初めて『人形の家』が上演された際に翻訳を担当した、島村抱月訳『人形の家』（早稲田大学出版部、大正二年四月）及び、『ノラ』と改題させ抱月訳とは違った新しい『人形の家』を作り上げた森鷗外訳『ノラ』（岩波書店『森鷗外全集第十四巻』所収、昭和四五年一二月）の二つのテキストを使用することにした。詳しい内容に入る前に、『人形の家』の簡単な筋を追っていく。なお、登場人物名は鷗外訳に従った

第一幕では主人公ノラの元に、夫を亡くし職を探す友人、リンデが訪ねてくる。夫ヘルメルにリンデの職を紹介してもらうよう頼み、優越感に浸るノラ。しかし、そこへノラが昔お金を借りた男、クログスタットが現れ、借金の事をばらされたくなければ自分の復職を夫ヘルメルに約束させるよう脅す。第二幕に入り、ノラはリンデの助言を得てヘルメルにクログスタットの事を相談しようとするが、ヘルメルは既にクログスタットを解雇させ、そのポストにリンデを置く事を決めていた。さらにクログスタットからヘルメルに借金について書いた手紙を送ったと聞かされ窮地に立ったノラは、手紙からヘルメルの気を逸らそうと懸命な踊りを見せる。第三幕、結局ノラの努力も空しく、ヘルメルはクログスタットから送られた手紙を読み、社会的な自分の立場が無くなるとノラを激しく叱咤する。しかし、とある事からクログスタットは改心し、証文と謝罪の手紙を送ってくる。自分の社会的地位が保たれたと安心したヘルメルは、それまでの態度を一変させ、何事も無かったかのようにノラを許そうとする。しかし、この事件を通してノラは今までの結婚生活が夫の「人形遊び」であった事、自分が夫の所有物ではなく「一人の人間」であるという事に気付き、全てを捨てて家を去る決意を固めて

いた。以上が『人形の家』のあらすじである。

それでは、実際に作品中の職業観が描かれている箇所を見ていく。各台詞は鷗外訳と抱月訳の二つを対にして引用した。丸で囲んだ数字（①、②…）が鷗外訳であり、漢数字（一、二…）が抱月訳である。

① ヘルメル　あゝ。固い地位が出来て、十分収入があるやうになつたと云ふ心持は別段だなあ。さうぢやないか。さう思つてゐるのが、保養だ。

一　ヘルマー　あゝ、地位は固まるし、金は取れるし、素晴らしい勢だ。考へると実に愉快ぢやないか。

② ノラ　（略）もうお聞きなすつたか知りませんが、つひこなひだわたしどもには**大した運**が向いて来ましたの。（略）まあ、どうでせう。宅が株式銀行の頭取になりましたの。（略）えゝ。**全く大為合せですわ。**弁護士なんと云ふものは、然つか上品な、正直な為事ばかししてゐようと思ふと、それは引当にならない商売ですの。所で宅は元からさうした気象でせう。わたしだつてそれ丈は気を合わせて遣つてゐましたの。ですから、あなた、察して下さいな。わたし達は本当に喜んでゐますの。新年にはいり次第、銀行に出勤して、**大した給料を貰ひますし、それに配当もたつぷりございますの。**ですからこれからは暮しだつて、今迄とは丸で変つて来ますわ。好きな事が出来ますの。あゝ。わたしなんだか身が軽くなつたやうな、嬉しい心持になつてゐますのよ。お金が沢山あつて苦労はちつともないとなると、まあ、兎に角、好いわね。あなただつてさう思でせう。

二　ノラ　（略）だけど、もう、お聞きになつたでせう？私どもで**大変な出世**をしましたことを。（略）まあ何でせう、宅が株式銀行の支配人になつたんですよ。（略）はあ、ねえ？弁護士なんてものは、極まつた宛のない職業ですからね。ちよつとでも暗いとこのある仕事はすまいとなると、尚のことさうですし、宅は勿論暗いことが大嫌ひで、私だつて其主義ですから、到底やり切れませんわ。それで今度は私ども、何んなにか喜んだでせう？新年から其方へ行くことになつてるのですよ。**給料もどつさり取れて、配当もあるんですからねえ**、是れからは、すつかり今までと違つて、見違へるやうな暮しが出来ます――実際何んな暮しでも好きなことが出来るんですよ。あゝ私、本当に気が浮き／／して、幸福ですの。お金が沢山あつて、心配事は少しも無し、申分は無いでせう

この場面のノラやヘルメルからは、収入の多い職に就き、生活が安定したことを心から喜んでいる姿が読み取れる。働かなければ生活できなかった頃とは違い、夫の十分な収入でお金の心配をせずに生活できると喜ぶノラからは、「夫の人形」でしかない妻の姿が表わされているだろう。一方、リンデからは、働くことへの必要性を説く台詞が発せられる。以下はノラとリンデが、お互いが今までどのような生活をしてきたかを語り合う場面である。

③ リンデ　それからわたし小さい小間物屋をしたり、小さい学

校をしたり、種々雑多の事をして凌いで行きましたの。此三年と云ふものは、わたしのためには息休めの出来なかつた、**長い、長い一日のやうな気がしますのですが、**それも今日はおしまひですの。もう母のために稼がなくても好くなりましてね。亡くなつたものですから。弟達ももう世話なしなの。それ／＼、商売に有り付いて、遣つて行けますから。

三　リンデン　それから色々工風しまして、店を開いて見たり、小さな学校もやつて見たり、出来るだけの事はして見ました。この三年間は私に取つちや、**長い一続きの戦争でしたよ。**けれども、もうそれも終へました。心配してゐた母は、もう私に用の無い身にまつて、墓場へ行きますし、子供たちは実業の方に口があつて、独立してやつてゐます。

④　リンデ　いゝえ。只なんとも云へない、虚つぽになつたやうな気がしますの。誰のために働かうと云ふ相手がなくなつたのですから。（**不安らしく身を起す。**）実はそれで片田舎の家にゐられなくなつて来ましたの。ここならわたしが身を打ち込んで、余計な事を思はないでゐられるやうな為事の口も、見付かり易くはないかと思ひましてね。**あぶなくない口**でね、何か**事務所のやうな所**へでも使つてくれる人がありましたら。

四　リンデン　いゝえ、ノラさん。何とも言へない淋しいものですよ。誰を宛に生きてるといふぢやなし。（**いら／＼した様子で立ち上がり**）私があんな辺鄙に居堪えられなくなつたのも其のためです。こちらへ参つたら、本当に為甲斐のある仕事が見つかるだらうと思ひましてね、何でもいゝから、私の気を外へ散らさせない仕事が為たいと思ひますのよ。何か**極まつた勤め口**でもあればいゝんですがねえ――**会社へでも出るやうな**――

③の鷗外訳では、働いていた時間を「長い、長い一日」と表現しているのに対し、三の抱月訳では「長い一続きの戦争」と表現されていた。しかし、④、四からわかるように、誰かのために働いていたリンデは、いざ仕事がなくなると不安に襲われ、（抱月訳では「いらいらした様子」と表現。）なにかちょうどいい勤め口がないか相談を持ちかけている。リンデは働くことを望んでいるのである。また、今まで働いていた自分に誇りを感じていたことが、次の引用から窺える。

⑤　ノラ　あなたは丸つ切わたしを馬鹿にして入らつしやいますがね、それはさうなさらない方が宜しいのよ。あなただつて、詰まり、長い間、うんとおつ母さんのために働いてお出なすつたと**云ふのでせう。**

五　ノラ　あなたが私を見くびつて居らつしやるのは知つてますけれどねあなたに其の権利はなくつてよ。おつ母さんの為に長い間一生懸命お働きなすつたといふのが、**あなたの誇りでせう？**

⑥　リンデ　いゝえね、わたしどなたをだつて馬鹿になんぞしや

しませんの。ですけれどたつた一つわたしの自慢話がありますの。それは母が亡くなる前に、暫くの間苦労をさせないやうにすることが出來たと云ふのが、**自慢でもあり、僥倖でもございますの。**

六　リンデン　私決して人様を見くびりなんか為ません。もつとも、私が母の最期を安楽にさせたと申すことは、考へると**嬉しくもあり、誇りとも存じてゐます。**

⑦　ノラ　それに御兄弟お二人のためにもおなりになつたのを**誇つて入らつしやるでせう。**

七　ノラ　それから、あなたの御兄弟の為めにお盡しなすつた事も**誇りでせう？**

⑧　リンデ　えゝ。それも当り前ぢやなくつて。

八　リンデン　当然ぢやありませんか。

⑤、五から⑧、八にかけて続くノラとリンデの会話から、リンデは、女である自分が働いて家族を支えた過去を誇りに思っていることが分かるだろう。『人形の家』において、働くことは決して非難されるべき行いではなかったのである。リンデが働いて誰かの役に立ったことを聞いたノラもまた、自分が過去に働いた時の経験を話している。それが次の引用である。

⑨　ノラ　さうでせう。でもわたしまだ外の収入があるの。去年の冬なんぞは、為合せと写し物を沢山頼まれたの。部屋に引つ込んで、毎晩遅くまで書きましたの。どうかすると草臥れて、草臥れて。でも**働いて、儲けるのは面白いものね。も少しで男になつてしまつたやうな気がしましたの。**

九　ノラ　まあそれはいゝとして、其の外にも私、別口で金をこしらへましたのよ。去年の暮、大変好い都合でしてね、写し物をどつさり頼まれました。毎晩、夜晩くまで閉ぢ籠つて書きましたつけが、時々随分疲れて、仕やうのない事がありましたよ。けれども**あんな風に働いてお金を儲けた時は、いゝ気持ですことねえ。全で男になつたやうな気持ですわ。**

ノラの働くことに対する感想を、鷗外は「面白いものね。」と訳し、抱月は「いゝ気持ですことねえ。」と訳しており、どちらも肯定的な言葉を使用している。お金を稼ぐために、生活を成り立たせるために嫌々働くという気持ちではなく、ノラは働くことに対してプラスの感情を持っているのだ。このノラの言葉は『人形の家』の職業観を考える上で重要な台詞であろう。女性の職業に対する積極的な姿勢が読み取れる台詞である。次に、ノラが夫ヘルメルにリンデの職を探してくれるよう懇願している場面を見ていきたい。

⑩　ノラ　この方**事務所何ぞの為事**がひどくお上手なの。で是非しつかりした人に指図して貰つて、これまでの手際よりもつと

旨くなりたいとお思なすつて。

一〇　ノラ　ね、あなた、クリスチナさんは**算盤**が非常にお上手なんですよ。ですから何うか第一流の事業家に使つて貰つて、もつと修業がしたいといふお考なのです――

⑪　ヘルメル　そこで**帳場の様な所の為事**には慣れてお出ですか。

一一　ヘルマー　で、**会社などの業務**に御経験がありますか？

⑫　リンデ　えゝ、可なり出来ます積りで。

一二　リンデン　充分ございます。

⑬　ヘルメル　好い工合です。それだと、多分適当な地位を拵へてお上申すことが出来さうです。

一三　ヘルマー　ははあ、それなら何処かへお世話が出来さうですな。

ヘルメルはリンデに、未婚かどうかと仕事に対してどれ位経験があるかを尋ねている。⑬、一三でヘルメルが「適当な地位を拵へてお上申すことが出来さう」「何処かへお世話が出来さう」と言っているように、仕事に対するスキルがあれば、性別は関係なく職業のポストに就ける環境があることが読み取れる。さらに、注目したいのはそれが肉体労働ではなく「帳簿の様な」（⑪参照）「会社の業務」（一一参照）といった知的な仕事である点だろう。女だからといってその職業内容が差別されない点もまた、この作品の重要な職業観の一つである。それは、二幕のヘルメルの台詞（⑬、一三）からもわかる。

⑬　ヘルメル　だがね、**己はリンデさんを据ゑるやうに、あの男の地位を取つて置いたのだよ。**

一三　ヘルマー　でもお前、**私がリンデンの奥さんに向けやうと思ふのは、あいつの地位なんだよ。**

ここで言われているあの男（あいつ）というのは、クログスタットのことであり、ヘルメルはリンデを今までクログスタットがいたポストに据えようとしている。この台詞からも男女が同じ地位につけることが理解できた。

第三章に入り、リンデとクログスタットが会話をしている箇所でリンデは自分が働くことについてどのように思っているのかを語る場面がある。

⑭　リンデ　**わたしは生きてゐては、為事をしないではゐられない性分です。**思ひ出されるだけ古いことを考へて見ましても、わたし終始為事をしてゐました。そしてそれがたつた一つの、一番嬉しい楽しみでした。それに今わたしは本当のひとりぼつちになつて世の中に残つてゐます。恐ろしい、脱殻になつ

たやうな心持で、取り残されてゐるのです。さうなってしまつて、自分一人のために働くのは楽しみにはなりません。ねえ、あなた、わたしが誰のために働くとか何のために働くとか云ふやうに、相手になる人なり為事なり拵へては下さいますまいか。

一四　リンデン　**何によりも仕事をしなくてはなりますまい？仕事をしなければ生きて行けませんからね。**私の記憶してゐる限りでは、私は一生仕事のし通しですよ。仕事が私にとつては非常な楽しみになつて居ました。所が、かうして唯一人になつて見ますと、自分で自分を当に仕事をするといふことは、ちつとも幸福なものぢやありません。ですからね、あなた何うか当にして働く甲斐のある人を私に見付けて下さいな。そんな風にして仕事をさせて下さいな。

鷗外は「わたしは生きてゐては、為事をしないではゐられない性分です。」とリンデに語らせており、リンデの仕事をしたいという強い思いが伝わってくるような台詞になっているのに対し、抱月は「何によりも仕事をしなくてはなりますまい？仕事をしなければ生きて行けませんからね。」と、経済的な側面から職業を捉えているような言葉で訳している。鷗外の方が、仕事に対する喜びや、やりがいといったものを読み取りやすい翻訳になっており、鷗外は女性が職業に就くことに対して、積極的な考えを持っていたのではないだろうか。それは自覚したノラがヘルメルと会話をしているところからも読み取ることができる。

以上、『人形の家』の中で登場人物達が持つ職業観を、鷗外訳、抱月訳の二つを引用して考察を進めた。作品全体を通してリンデの台詞からは、働くことに対する誇りや必要性が読み取れる。リンデが事務という知的な職業に就く点からは、女性だからといって差別されない職業環境がこの作品の中にあることがわかるであろう。ノラも「働いて、儲けるのは面白いものね」（鷗外訳⑨参照）と語っており、女性が働くことに対して積極的、肯定的に捉えられているのである。また、鷗外と抱月、二つの訳を見ることで、鷗外訳の方が女性の就職に対するやりがいが大きく描かれていることが⑭（一四）の引用からわかった。

このように、『人形の家』は働く女性、自立する女性が描かれており、それは当時の「良妻賢母」に逆行している考えであった。この作品に触れた読者や観客は、その心の内に女性の「自立」や「職業」について少なからず考えたのではないだろうか。『人形の家』が人々の意識に変化を与えた一つのきっかけであったことは、社会に一大センセーションを巻き起こしたことからも推測できるだろう。

第一章で『人形の家』の職業観を考察し、この作品中には、女性の積極的な職業環境が描かれていること、日本女性の職業観に問題提起をするような台詞が多々あることを明らかにした。次の第二章では、『人形の家』上演前後において、日本女性の職業がどのような状況であったのかを考察していきたい。

二　『人形の家』上演前後における女性と職業

この章では、『人形の家』が日本で上演された明治末期から大正初期を中心に、日本女性の職業がどのような状況に置かれていたのかを考察していく。前章で明らかにしたように、『人形の家』は女性の自立をテーマに、職業について多くの記述があった。この作品に触れたであろう女性たちが生きていた時代の職業を見ていくことで、日本における『人形の家』と職業のつながりを見出すことができるのではないだろうか。

考察に入る前に、日本における職業婦人の流れを簡潔に紹介したい。女性が職業と関わりを深くしていくのは、日露戦争後である。遺家族の生活問題、戦後の子育て問題の浮上、貧困層の拡大など、自身の生活維持の必要性に迫られて職業に目を向け始めたのである。それ以前にも女性の職業が無かったわけではない。教員や看護婦、助産婦、医師、電信電話の交換手、速記者などは比較的早い時期から女性の職業分野として存在していたが、社会の目から見ると未だ職業人として認められてはおらず、女性が職業に就くということ自体に対する理解が無かった時代であった。明治三〇年代に入ると政府による良妻賢母主義教育が徹底され、「家」中心の考えが深まっていくのである。その後、先述したように日露戦争の終戦をきっかけに女性の職場進出は盛んになるが、女性の就職に対し世の中の意見は否定的なままであった。そんな中、明治末期の四三年六月「東洋時論」第一巻第二号に「女子職業熱の勃興」と題した評論が掲載された。この評論では「女の職業にたいする軽蔑や反感、嫌悪が分析すれば男の偏見によるものである」一（村上信彦『大正期の職業婦人』）といった意見が述べられ、当時としては革新的な主張が発表されたのである。松尾氏も自身の著書の中で、「“青鞜”よりも一歩進んで、婦人の経済的自立の必要性を論じ、職業婦人蔑視の俗見と闘った」二雑誌であると述べている。このように、明治末から大正期にかけて、徐々に女性の職業に対する差別的な視線が少なくなっていく。この偏見をなくすきっかけは、女性雑誌で職業を取り上げたことによると村上氏は指摘している。三大正期に入り、新聞や雑誌が女性の職業に関する記事を掲載し、それが読者や世間に大きな影響を及ぼし、女性の一つの生き方として認められるようになったのだ。

このように、『人形の家』が上演された時代の女性の職業を理解する上で、雑誌の職業に関する記事は注目すべきものであろう。そこでこの章ではまず、職業を取り扱った雑誌記事について見ていきたい。

はじめに、明治四一年という早い時期に女性の職業に関する投稿論文が掲載された、雑誌「女子文壇」について考察を進める。この雑誌は明治三八年一月から大正二年八月まで発行された文芸雑誌である。内容は、小説や詩、論文と多岐に渡り、明治四二年一月には木下尚江、新渡戸稲造、三輪田元道、安部磯雄、姉崎正治、成瀬仁蔵によって『近代女性の自覚』特集も組まれ、新しい女性のあるべき姿が示唆された。また、大正二年には『婦人文芸』の特集も試みられ、女流文芸の振興に大きな功績を残した雑誌であった。

「女子文壇」で初めて女性の職業について触れられたのは、明治四一年八月号の駒形すみれが女性の職業拡大について意見した投稿

論文「女の職業」においてである。以下、一部を抜粋する。

古から我が国では女は男に頼るべきものと思ふて、職業など覚え様とする者はありませんでした。（略）然しこれからの女の取るべき職業は益々拡張されて、何処の国でも女が男の領分に立ち入つて盛んに其の職を蚕食する様になるのでありましよう。（略）独立して行ける位の職業を覚えて、男の軽侮に対して反抗心位は起してもよろしからうと思ひます。一体女が男に翻弄物視せらるゝのは何故でありましようか？つまり自個の力に依つて立つ丈の職業を知らない為め、絶対的に男を頼り自然と翻弄物視せらるゝ様になるのでありましよう。して見れば女だからとて自分で独立して行ける丈の職業があつたならば、男子から軽侮される事もありますまい

この論文からは、日清戦争後にあったような、生活の必要性に迫られて職業をするという考えよりも、むしろ男性と平等に渡り歩く手段として女性が職業を捉えはじめていることがわかる。この論文を期に、ほぼ毎月に渡って女性の職業に関する論説が紙面に登場するだけでなく、明治四三年になると、実際に職業に従事している女性の体験談記事が数を増やしてくる。金子幸代氏、伊藤惠理氏が「女性雑誌と職業―一九一〇年～一九一三年における「女子文壇」の文化的研究Ⅱ」（富山大学人文学部紀要第四九号、二〇〇八年八月）で「一九一〇年（明治四十三）一月から一九一三年（大正二）八月までにおいて、女性の事務員に関する記事は教師に次いで二番目に多く全体の一割以上を占めている」と指摘しているように、事務員は人気の職業の一つだったことがわかるであろう。ここで指摘したいのが、『人形の家』においてリンデが希望していた職業もまた、事務員であった点である。『人形の家』は女性の自立をテーマとして、観客や読者に職業に関する問いかけをした作品であったことは第一章で考察してきた。そこで、次では「女子文壇」での事務員に関する記事を見ていきたい。なお、事務員に関する記事については、金子幸代氏と伊藤惠理氏による「女性雑誌と職業―一九一〇年～一九一三年における「女子文壇」の文化的研究Ⅱ」の資料、【表3女性の職業関連記事・職業別】を参考にした。以下、本論中の括弧囲み数字（【1】、【2】…）は、巻末に掲載した資料「女子文壇」における事務員に関する記事の通番と対応しているので、そちらも参照してほしい。

「女子文壇」において、事務員に関する記事は明治四三年には六つ登場する。その中には父親が亡くなって家庭の金銭的な問題から、仕方なく事務をしている随筆が二つあった。（【3】随筆「女子事務員の朝夕」、【4】随筆「寂しき家」）家計を助けるために、虚栄や誇りを捨てて事務員を務める彼女たちからは、この仕事に対する消極的な姿が窺える。その一方で、【6】本欄「女子判任官と語る」の記事では、世間の目の冷たさや徹夜の辛さが嘆かれている反面、女子の職業について今少し地位を高めて欲しい、体質の面では男子に負けるかも知れないが、仕事の面では引けをとらないといった仕事への積極的な意見が述べられていた。明治四四年の事務員に関する記事は一つである。（【7】本欄「加納子爵の家庭◎信用組合の開祖◎子爵夫人自ら事務掛り」）演劇界では、この年の九月に試演場で『人形の家』一幕と三幕が、一一月には帝国劇場で『人形の家』全幕が

上演されるのだが、その翌年の明治四五年に【8】評論「事務員」が掲載される。この評論記事では、女は嫁に行くほか道はないと言われていた世の中だったが、女性の進歩に伴って事務員が登場してきたことが喜ばしいと書かれていた。それに続き、女は世の中の役に立たないと言われていたのが、今では多数の会社で雄々しく働いており、女性の活動の端緒が開けて嬉しいと筆者は感想を漏らしている。さらに今後の課題として「今少し重々しく、社会一般より重要視せらるゝ様になりたいものではありませんか。(略)女に自由な空気を吸はせ、亦自由な活動を興へる事が目下の急務であると思ひます」と女性の社会進出が主張されており、筆者の強い思いが伝わる記事であった。この評論は編集側から「地賞」に選ばれ、「空しい気焔とは違ひ、根抵を現実に置いた確かな意見である」と高く評価されている。このように演劇界で『人形の家』が上演された明治末期、職業婦人に対する差別的な視線が少なくなるにつれ、事務員という仕事も少しずつ社会の中で大きくなっていったようだ。この記事以降、「女子文壇」が廃刊する大正二年までにおいて、事務員の記事は七つある。そのうち小説は五つあり、主人公は全員「事務員」として働いている。(【9】「恋知らぬ人」は男性事務員の手伝いをする少女が描かれているが、それ以外の四つは全て事務員の女性を主人公とした話である。)小説の主人公が事務員をしている姿からは、この職業が職業婦人の仕事として一般的になってきた事実を反映しているのではないだろうか。

以上のことから、雑誌「女子文壇」は女性が職業に就くことに対して積極的な姿勢を取っていたことがわかった。村上氏も指摘しているように四、女性雑誌で多くの職業を取り上げ紹介することが、職業婦人に対する社会の偏見を無くしていった一つの大きなきっかけになったと言えよう。その中で教師に次いで二番目に多く登場した事務員五は、女性の新しい職業の一つと認識されていく。特に明治四四年に『人形の家』が文芸協会によって日本で初上演されて以降、翌年四五年には評論「事務員」が掲載されたのは注目に値するだろう。女性にとって結婚が人生の最も重要な職務であった時代が変化し、事務員として働くことで世の役に立っている喜びを述べたこの評論は、読者の女性たちに少なからず影響を与えたのではないだろうか。その後も事務員を仕事とする主人公の小説が数多く「女子文壇」の紙面を飾ることとなる。このような事務員に関する記事が増えた背景には、職業婦人に対する人々の関心の高まりだけではなく、演劇界を超えて社会に大きな反響を呼んだ『人形の家』でテーマになった女性の「自立」「職業」の影響があるように筆者は考えるのだ。

ここまで、「女子文壇」における職業婦人に関する記事を、特に「事務員」に焦点をあてて考察した。次からは、統計データをもとに、数値的な視点から日本女性の職業を見ていきたい。

先に、女性職業の資料不足について一言述べておく。明治から大正にかけて、日本の職業婦人は増加の一途を辿っていたのに対し、政府はそれを軽視していたため、まとまった調査・研究が行われなかった。そのため、体系的な統計データは無く、一般民間の職業婦人に関する正確な記録は残っていないのが現状である。ただ、五〇人以上の女工を収容していた工場や文部省に属する女性教員の数、逓信省などの女性職員の数はある程度数値が出ているが、それも必ずしも正確だという保証はない。そのため、これらの数値は近似値

を示していると考えていただきたい。

前半で雑誌「女子文壇」の考察をした時と同じく、事務職やそれに近い職業（知識職）を中心に論を進めていきたい。村上氏が、「わが国で最初に女の事務員が採用されたのは、私の知るかぎり明治二七年の茨城県河内郡竜ヶ崎町役場と大阪の三井銀行支店であった。次いで明治三一年には日本銀行が計算係に、三三年には安田生命保険会社が保険料掛に女を採用した。」と指摘している。[六]明治三〇年前後に始まった女子事務員の採用は、明治初期からあった女教員を除いて、女性が知的な職業に従事していくスタートを飾る職業となった。

表①を見てほしい。これは明治後期から大正初期における、電信電話事務の就職者数を表にしたものである。男性の人数が四分の三を占めているものの、女性の電信電話事務員は年々増加傾向にあることがわかる。大正八年になると、女性の電信電話事務員が一万台を突破する。同じ時期の高等女学校の女性教員数が約二五〇〇人であることを考慮すると、この数は女性の職業として比較的多いのではないだろうか。

また、大正七年に開かれた第十二回社会政策学会[七]において、森戸辰男が「日本に於ける女子職業問題」[八]という研究発表を行った。この研究論文の統計を見ると、大正二年において、約一一九八万九千人の女子が何らかの職業に従事しており、そのうち商業及び交通業に関する職業を行っているのは、約一二〇万人を数え、有業女子の約一割にあたった。（資料編表②参照）商業及び交通業の中には、物品販売、売買仲買及び周旋業、金融及び保険業、宿屋飲食点遊技場及び興行場に関する営業、交通業の五つが含まれている。約一二〇万人のうち、ほとんどはデパートメント・ストアで接客をしているストア・ガールであるが、職業内容に事務作業が含まれる為替貯金局の女性職員は大正元年には七六四人おり、この数は年々増加していた。（資料編表③参照）森戸氏が論文の中で「我国に於ても亦他の諸国に於けるが如く益々多くの女子が商業及交通業の方面にその営利の舞台を見出しつゝあることを推知し得るのである」「国民経済の商工化につれて農業女子の数は比較的に、後には恐らく絶対的に、減少し、所謂手助家族の数は、著しく減少するであらう。（略）従って彼等の多くは家庭以外に於て、特に商工業及自由業に於て新しき地位を求めて、完全なる職業女子となりつつあるのである」と推測している。このように、明治末期から大正初期にかけて、日本女性の就く職業が知的労働へと変化していること、それが今後増加の一途を辿ることが、統計データを分析していく中で明らかになった。

年次	男性	女性
明治 39 年末	27,264	1,103
明治 42 年	29,180	2,798
大正元年	31,821	4,519
大正 4 年	32,290	5,648
大正 7 年	35,263	8,198
大正 8 年	39,172	10,037

表①明治後期から大正初期の就職者数

【電信電話事務】（出典）『日本帝国統計年鑑』第四〇回（内閣統計局、大正 10 年、12 月）

本論文では、日本で『人形の家』が受容、上演され反響を得ていく中でこの作品が果たした役割を職業婦人と関連付けながら、作品

中の職業観や女性雑誌記事、統計データなどから解明してきた。

まず第一章では、実際に『人形の家』の登場人物たちがどのような職業意識を持っているのかを把握するため、上演台本になった鷗外と抱月の翻訳『人形の家』をもとに、職業観がわかる部分の考察を進めた。作品には、自立する女性であるノラと働く女性リンデが描かれており、彼女たちからは働くことへの積極的な言葉が発せられる。「良妻賢母」に逆行するような二人の女性の生き方は、『人形の家』に触れた読者、観客に「働く」ことや「自立」することに対して問いかけ、訴えかける作品になったのではないだろうか。

第二章では、雑誌「女子文壇」における職業婦人に関する記事を、リンデと繋がりの強い「事務員」に焦点をあてて考察を行った。記事数一五を数え「教師」に次いで二番目に多かったこの職業は、確かに新しい女性の職業として注目されていたのである。さらに、当時の日本女性の職業に関して、統計データをもとに検証を行った。明治末期から大正初期は、女性の職業が肉体労働から知的労働へとシフトする過渡期であり、その中でも事務員を含む商業金融業に従事する女性がますます増加することが推測できた。以上のように、この時期は女性の職業が変化し、注目を集めていたのである。それと期を同じくして上演された『人形の家』に含まれる「自立」「働く」というテーマは、第二章で見てきた職業婦人の盛り上がりの動きに、少なくはない影響を与えたと考える。

『人形の家』の日本受容、上演に対して、作品から、婦人雑誌から、統計データからとあらゆるアプローチを試みた。この作品は刻一刻と変化していた日本女性の職業に、「自立」や「働く」ことの意味を問いかけ、職業婦人の盛り上がりの一端を確かに担ったのである。明治末期から大正初期という、演劇界も女性職業も変革を迎えていた時期に『人形の家』が受容、上演され広まったことは、女性の新たな生き方に対する問題提起として人々に受け入れられていった。現代の女性問題を考える上でも、この作品が果たした役割は大きいのである。

これまでの研究では、自立した、目覚めたノラに注目され作品が論じられていたように感じる。しかし第一章でも考察したように、この作品から女性の職業を見るとき、そこには自覚した女性ノラだけではなく、生きがいとして職業をするリンデにもまた注目するべきであろう。新しい女となったのはノラだけではない。リンデの持っていた女性としての自立、職業観を明らかにすることで、彼女もまた新しい女の一人だったのである。女性の生き方に問題提起をした『人形の家』にはノラとリンデの二人の女性がいたことを見過ごすべきではない。

一 村上信彦『大正期の職業婦人』（ドメス出版、昭和五八年、一一月）
二 松尾尊兊『大正デモクラシー』（岩波書店、昭和四九年、五月）
三 注四に同じ
四 注四に同じ
五 金子幸代氏・伊藤惠理氏が「女性雑誌と職業―一九一〇年～一九一三年における「女子文壇」の文化的研究Ⅱ」（富山大学人文学部紀要第四九号、平成二〇年、八月）で「一九一〇年（明治四十三）一月から一九一三年（大正二）八月までにおいて、女性の事務員に関する記事は教師に次いで二番目に多く全体の一割以上を占めている」と指摘している。
六 注四に同じ
七 戦前において女性労働をテーマとして開かれた唯一の学会。

資料編

「女子文壇」における事務員に関する記事（「女子文壇」明治43年1月～大正2年8月）

通番	年月日	巻号	増刊名	分類	執筆者	題名	頁
【1】	M43.2.15	6-3	若き婦人	随筆	筆子	二十才の声	2～6
【2】	M43.2.15	6-3	若き婦人	随筆	つゆ草	楽に受けたる文部省検定試験	15～18
【3】	M43.2.15	6-3	若き婦人	随筆	さよ	女子事務員の朝夕	42～44
【4】	M43.5.15	6-7	都会の婦人	随筆	優梨子	寂しき家	176～178
【5】	M43.6.1	6-8		書簡文	百合香	事務室より	126～127
【6】	M43.8.1	6-10		本欄	野に降る雨	女子判任官と語る	24～26
【7】	M44.1.1	7-1		本欄	佐々木好母	加納子爵の家庭　◎信用組合の開祖◎子爵夫人自ら事務掛り	73～77
【8】	M45.5.1	8-5		評論	さみだれ	事務員（地賞）	129～130
【9】	T1.10.1	8-10	十月特別号	小説	かすみ	恋知らぬ人（人賞）	218～219
【10】	T1.11.1	8-11		小説	小やな	一日	95～96
【11】	T1.12.1	8-12		小説	扇花	出勤日記	69～70
【12】	T2.1.15	9-2	現代婦人	随筆	桜木雪江	都会と地方と事務員の生活「朝の出がけ」	134～137
【13】	T2.1.15	9-2	現代婦人	随筆	加藤萩香	都会と地方と事務員の生活「一日の仕事」	137～140
【14】	T2.3.1	9-4		小説	小やな	一隅にて（人賞）	122～124
【15】	T2.4.15	9-6	婦人文芸	小説	秋花	帳簿の金文字	120～123

注）一覧作成に関しては金子幸代・伊藤惠理著「女性雑誌と職業――一九一〇年～一九一三年における「女子文壇」の文化的研究Ⅱ」（富山大学人文学部紀要第四九号、平成20年8月）を参照した。

職種	女性の人数（千人）
農業及び漁業	8,602
工業及び鉱山業	1,259
交通及び商業	1,209
公務及び自由業	312
その他の有業者	462
無職	142
計	11,989

表②大正二年の各種職業における女性の推定数（出典）森戸辰男「日本に於ける女子職業問題」（社会政策学会編『婦人労働問題』《女と職業》5所収（大空社、平成5年、5月）

年次	女性職員数（人）
明治42年	789
明治43年	716
明治44年	764
大正元年	764
大正二年	765
大正三年	781
大正四年	868
大正五年	862

表③為替貯金局及び同支局所属の女性職員数（出典）森戸辰男「日本に於ける女子職業問題」（社会政策学会編『婦人労働問題』《女と職業》5所収（大空社、平成5年、5月）